

国際耕種と私・財津吉壽<その2>

国際耕種での日々活動

前号にも書いたが国際耕種（AAI）の出足は比較的順調であった。中央開発（株）時代から関わっていた案件には大沼も含めて業務の継続参加も認められた。また事務所を共にした坂場さんのエコプラン（林業コンサルタント）からは、国内業務参加の足掛かりを頂戴した。当時の私にとって日常的な専門知識の吸収は不可欠であった。また専門ばかりでなく、毎日の領収書整理や他社との業務調整等の事務作業は、その後の AAI 運営に非常に役立っていった。

さて、AAI に入社し、開発コンサルタント業務に参加する一員としてひとつの夢があった。それは長期派遣型の業務に携わることであったが、その機会は予想以上に早く到来した。1989 年に入社後、1991 年から静岡大学と UAE 大学との共同研究で砂防植林・節水農業専門家として、そして 1996 年からはオマーン南部ネジド州に設立された農業研究所への若手研究者への技術指導で派遣と、矢継ぎ早に達成されていった。

長期派遣時の経験は、私の専門技術の蓄積や新たな専門領域の拡大を大いに助け、AAI の技術運営の一翼になった。また、現地での技術スタッフや日本から訪問してくる技術者、大学関係者との多くの人的交流は、その後の AAI の乾燥地農業を目指す専門家集団として無くてはならない財産となった。そうこうしていたこの派遣期間中に湖東が仲間に加わり、国際耕種の大沼・湖東・財津体制が確立した。

大沼と湖東はよく同一プロジェクトで行動を共にしていたが、私の約 30 年間は、なぜか彼らをはじめ、社員のだれともプロジェクトを共にしたことがほとんどなかった。天の巡りあわせである。常に他社プロジェクトの補強要員、もしくは単独型の業務であった。一度は大沼、湖東と 3 人で同じプロジェクトで論議を戦わせながら一緒にやってみようと思ったこともあったが、今となって後悔はない。他社の多くの総括や専門家の中で、技術的・人間的に揉まれ、多くの専門技術も

吸収できた。またプロジェクトに迷惑をかけてはいけないという緊張感を常に持っていた。このような切磋琢磨が自己成長の礎になり、また社外から一定の信頼も得ることができたのだと思う。

技術蓄積も、本来の土壌・土地利用から衛星画像解析、GIS、灌漑水質、プロジェクトコスト計算、基礎栽培技術と広がっていった。そしてこれらすべての取得技術が活用され、最も充実感を得たプロジェクトの一つが、ヨルダンで行われた「イラク向け第三国研修」であった。バクダッド南西部に位置する Karbala 地区に水利組合による灌漑施設を建設し、そこで野菜栽培中心の営農を形成していくというシナリオで、関連技術者や現地農民がヨルダンに集まり、技術研修を連続的に行うことでプロジェクト形成をしていくというものである。各専門分野の講師は現地リソースを使うのだが、私はその総合コーディネーター的な立場で参加した。これは面白かった。各種講義を監督し、不足する分野の講師を探し、いなければ自身でも講義を行った。実習・視察へもアテンドした。夜は、専門グループ別に作業進捗を確認し、帰国前には現地情報収集リストを作成した。研修再開後は収集データの発表をアレンジし、本邦研修にも同行した。最終的にプロジェクト計画を完成した。イラクの優秀な研修員と一緒に作業できたことは忘れられない。

多くの国で、現地の農民や普及員・役人・研究者と付き合いながら仕事できたことに感謝である。違った国で、違ったプロジェクトでの人的交流の経験を、今後の私の活動に生かさなければ…そして後進をこの魅力的な業界へ導く責務が残されている。（つづく）



イラク向け第三国研修参加仲間と